

2017年9月25日

武田 知己

はじめに

2017年8月19日から21日の3日間、参加学生10人を引連れて、富山県南砺市を訪れた。昨年に引き続き、二度目の参加である。今年度は、松村謙三の生まれ故郷の福光町を中心に、五箇山集落や城端地区を視察した。なお、今年度は、成蹊大学から4人、三重大学から1名の学生の参加があった。教員の参加は、藤井誠一郎・武田の2名である。

以下、実施内容を報告し、次回の課題を示す。なお、1、2は参加学生の石川裕一郎君、4は中嶋力君、5は野本真之介君の手になるものであることを明記する。(ただし、まとめるにあたり、一部加筆し、体裁を整えた)

1. 松村記念館・南砺市中央図書館・松村家生家視察



開講式の挨拶をされる松村謙三顕彰会会長の桃野氏

最初に、松村謙三の故郷となる福光町の松村謙三記念館を視察する。同時に開講式も行われた。記念館は、1971年9月25日完成。総工費2390万円。松村は完成

の祝いを楽しみにしていたが、同年8月21日に帰らぬ人となった。2年後の5月に3階を増築し、松村謙三顕彰会から町へ寄贈された。1階は展示室、2階は床の間付24畳の和室が2室、3階は日中友好展示館になっており、庭園左側に紹興市との友好市町締結記念碑が建っている。

(1) 五松庵

今回は、ご遺族の松村寿氏の手になる特別展があわせて開催された。テーマの一つに「五松庵」があった。松村は、公職追放時代にはじまり、戦後の政治生活のほとんどをこの小さな茶室で過ごした。雑木林の中に埋もれた格好の五松庵で、松村の手になる唯一の本といえる『町田忠治翁伝』が執筆されたし、昭和27年の政界復帰後は多くの政治家や支持者の人々、報道関係者がここを訪れたという。

室内には尊敬する政治上の師、町田忠治の遺墨があった。松村は初当選の後1929年に町田農林大臣の秘書官となりその後常に政治活動を共にし、終生政治上の師と仰いだ。ここに

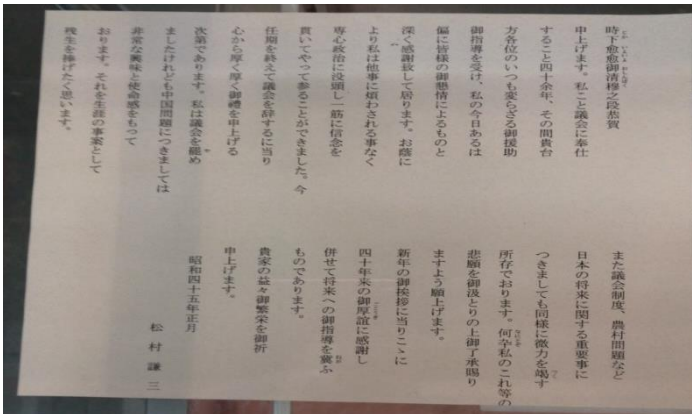
は、「先憂後楽」とある。意味は天下の憂いに先んじて憂え天下の楽しみに遅れて楽しむ。となる。



松村は、その町田が薪採取用に購入してあった近くの中野区鷺宮6丁目756の雑木林の土地を譲り受けた。そこで「私はこれを先輩

の記念林と心得ており、その当時の林相をそのままに、できるだけ原型を保存しているのがさて追放令を受けて隠居するとなると、それこそ理想的環境でそれから追放7年間の閑静な朝夕をここで送った。」と記した。

(2) 引退挨拶状

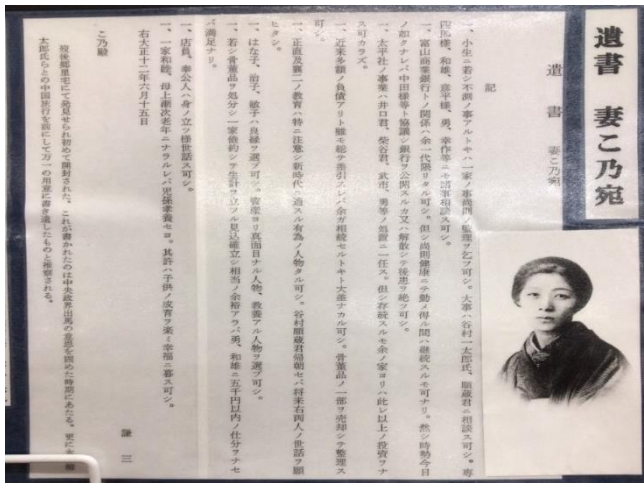


記念館には他にも松村が政界を引退する際に書いた引退挨拶状が原文であった。政治家を引退し、中国問題に残る力を集注したいと語る松村の気概が読み取れる。

(3) 図書館にあった松村謙三の紹介

次に、南砺市中央図書館を訪問した。ここにも、松村謙三を紹介する展示がされていた。市のどこでも松村の名前を見かけた。ここでは、松村が生まれた故郷ならではの、自分たちが調べたような方向性とは違うものが感じられた。

内容としては、松村謙三とは何をした人なのか？というところでは、福光町第一号名誉町民に選ばれた政治家で、日本と中国との関係が良くなるように粘り強く働きかけたことはとても有名で、また、日本の農業を近代化にするためにも力を尽くした。「刀利ダム」も謙三の働きによってできたことが紹介されていた。他に、どんな人か？というところでは、謙三が初めて国会議員に当選したとき、妻宛てに遺書を書いたことが紹介されていた。これは命を捨てて国のため、国民のために働こうとする謙三の決意の表れともいえる。また、謙三はたいへん誠実な政治家としても知られていて誰の話も親身になって聞かすが、そのお礼にお金をもらうことをとても嫌い、絶対にお金を受け取らなかったことも記されていた。最後に、どんな子供だったか？というところでは、薬屋の長男として生まれ、体は大きかったが、



ひ弱で病弱だったため医者からは「長生きできないだろう」と言われていた。そのため母親は手洗いを厳しくさせ、生ものは食べさせないなど細心の注意を払って育てていたようだ。父親は、中国の文人や画家などをよく福光に招いていた。謙三はその中で自然に中国の文化に親しんでいったといえる。

(4) 松村家生家・迎月亭（こうげつてい）視察



また、松村謙三が生まれた生家も訪問した。謙三の孫にあたる寿氏に生家の由来や松村家の歴史などを講釈していただく。

また、隣接する迎月亭も特別に見せていただいた。ここには、松村謙三の叔父にあたる清治が43歳で隠居したのちに寝起きした場所であり、ここで茶会や歌に興じた。また、

加賀藩に縁のある中国の儒者や遊説に訪れた尾崎弴堂・志賀重昂なども宿泊した。130年の歴史を有する。

さらに、この茶室は、歴史上だけでなく、建築学上も極めて貴重なものである。茶室研究書などにもすでに幾度か紹介されていることも確認できる。

今後とも何らかの形での保存が望まれる。



2. 刀利ダム

次に、展示にもあった刀利ダムを視察した。小矢部川の下流地域では、長年、干ばつの年は水不足が深刻になり水が盗まれないか夜も交代で水門の見張りをしたり、水の取り合いをしたりで人が出たりするほどであった。また、逆に少し長雨が続くとすぐ洪水になり、大切に育ててきた稲が全滅してしまうこともあった。そこで町議時代から、謙三は小谷部川の上流にダムを造って農家の人々の悩みを解決しようと考え始めた。しかし計画に反対す

る村全体がダムの底に沈んでしまう刀利の人たちもいた。謙三は戦争が終わり、追放解除されてから、たくさんの人の意見を親身に聞いて根気強く話し合いに臨み、6年もかけて説得した。建設は1961年開始、下流の灌漑施設などは、1965年から建設が行われ、1967年には完成式典が行われた。ダムが完成したときに「南砺無干」と、東砺波・西砺波両地方には干ばつはこないと言葉を残した。現在ダムのほとりにはダム建設に汗と涙を流した謙三をたたえた胸像が建っている。



3. 松村謙三精神を語ろう 夜のゼミナール

19日の夕方からは、参加する学生の研究報告会を、福光公民館で開催した。参加学生及び市民の皆さんにお集まりいただき、2時間ほどの間に、「松村謙三と中国」、「古井喜実に



ついて」、「高碓達之助と中国」、「50年代から60年代の日本政治史」について、二人ずつのグループを組み、それぞれ報告を行った。報告は20分と短かったが、多くの一次資料を用いた聞きごたえのあるものもあった。なお、このテーマは翌20日に開催されるフ

ォーラムのテーマに沿って行われた。その成果を踏まえて、学生たちはフォーラムの講演とパネルディスカッションに参加することになる。

4. 松村謙三先生を伝えようフォーラム2017

20日には、午前中の公開講座に出席したあと、村上友章流通科学大学教授の講演、そしてパネルディスカッションを開催した。

今回の公開講座・講演会・パネルディスカッションでは、松村にゆかりのある人物を取り上げている。それは松村研究者が少ないことが第一の理由である。次年度以降の最大の課題はここにある。

高碓達之助研究者の村上氏の高碓の講演では、高碓の歩みを詳しく論じながら、松村のアジア主義的あるいは大陸浪人的な性格や資質の類似性や政治の松村・経済の高碓という相互補完性が指摘された。公開講座では、松村が改進黨総裁に引っ張り出した重光葵に関しても、進歩的な政治理念やアジア主義的な関心の類似性が強調されている。こうした知見に加え、古井喜実らの足跡を交えたパネルディスカッション、さらには生前の松村を知る高木氏の回想談など、多様なテーマで議論が交わされた。



左から、大東文化大学法学部武田教授、流通科学大学経済学部の村上教授、富山県商工会議所連合会の高木会長、鳥取県国際交流財団の内田克彦常務理事

5. 五箇山集落・城端地区の町並み保存視察

最終日の21日には世界遺産である五箇山集落および近隣の城端地区の町並み保存を視察した。20日は実際に集落に宿泊し、住民の方々との交流もできたし、現在抱えている課題も知ることができた。

(1) 五箇山集落

富山県南砺市にある相倉合掌造り集落は、国指定史跡であり、世界文化遺産としても登録されている文化財保護地区である。これらの登録の話がでた当時、住民の中では賛否両論の意見が出たという。国の援助金が出ることでこの集落がこれからも守られ、保存されていく半面、登録された状態の景観を変えてはいけぬ決まりがある。豪雪地帯である

為、時代が進むごとに車庫を始めとする様々な便利なものが誕生しているがそれらを取り入れることができないという不便さもあることを学んだ。石柵によって作られている田んぼも、損傷があれば修復することは出来ても、作り変えることは出来ないのだという。

また、五箇山集落に隣接している山の地下には、住民用の車庫とトイレが新設された。史跡に登録されてからそれ以上の発展がこの地域にはないと思われていたが、国との協議の結果、景観を変えずに見えないところに建設するのが条件で認められたという。世界遺産で生活していく難しさとともに、工夫により、時代に合わせていくことが可能であることを証明している例だと思う。



ところで、合掌造りの景観を保存する上で重要なのは、屋根に使用されている茅（ちがや）である。これは、30-40年に一度付け替えている。しかし、住民の高齢化や改修工事の技術を習得している人が少なくなり、近年では外部からボランティアとして人を集めている状態だという。

茅は、集落に隣接している山の裏の急斜面に生息しており、栽培や収穫は住民が自ら行っているが、高齢化が進んでおり、集落の特徴である屋根を危険と隣り合わせで維持し続けているのだ。

五箇山集落は、現存する史跡の中でも数少ない住民がいる史跡だ。そこで生活が昔から行われている以上、いきなり文化財保護地域や世界遺産の名前がつき、加えて様々な制限が付くとなれば反対意見がでるのは当然だ。確かに観光客が増えて収益が増えれば集落の発展に繋がるだろう。しかし、普通の生活が常に誰かの視線を浴び、生活面での苦勞が市内で差がついていることも事実だ。今後の課題としては、今回は、住民の話を伺うと、皆前向きな言葉をくれたが、実際の声、そして実情をもっと知ることであると感じた。日本として世界に対して誇りが持てる集落があるということで終わらせずに、それを維持し続けるためにも、当事者の目線に立つ必要があると思った。

(2) 城端地区

城端地区は、地理的に五箇山集落の出入りに位置する。今回は、その城端地区で曳山祭を行うという観点から、コミュニティを守り、街並みを保存する取り組みを行っている様子を視察した。

城端地区は、享保期に入り、経済不況となり、その打開のために神輿を作り招福除災と



町内繁栄の為に神を祀ることから、江戸文化と京文化を融合させたような曳山祭りを始めたのだという。城端地区には6つの町があり、それぞれ西下町の諫鼓山には堯王、西上町の竹田山には恵比寿、東下町の東耀山には大黒天、出丸町の唐子山には布袋、大工町の千枚分銅山には関羽と周倉、東上町の鶴舞山には寿老が祀られている。それぞれの神輿の後ろには庵屋台が後を追いついて、町内の細道も通れるように屋根が折りたためるようになっている。夜になると提灯が取り付けられ、祭りの日は台車の音が町内に鳴り響く。

各神輿に乗っている人形は年によって別の家に置かれ、下から見るときれいな笑顔になるように作られている為、平行にみるとときとでは表情が違っていることなどを説明された。

また、今回は、実際に、曳山祭の中心となっている松平保夫氏、また南砺市文化・世界遺産課の此尾治和氏の説明を聞きながら、視察を行った。城端地区の町並み保存は曳山祭を中心に営まれているという感じを受けた。同時に重要伝統的建造物群保存地区として町並みを保存するには条件が満たされていないことも確認できた。

また、曳山祭の資金調達や後継者育成も重要かつ深刻な課題なのだという。こうした点も、現地視察で生の声を聴いた成果である。





おわりに

今回は

①学生が事前学習の成果を報告する場を設けたこと

②福光地区の視察だけでなく南砺市の特質を知る視察を組み合わせたこと

を特徴とする。そのため、本学科からは、松村謙三研究あるいは近現代政治史研究に関心を持つ学生以外に多様な学生の参加を可能とした。松村謙三という人物が故郷の福光でも伝えられることがなくなっているのだとしたら、全国でも同じことがより強調されていはいはずである。学生の参加を確保するのならば、こういった工夫は不可欠であろう。

その反面、政治史に関心を持つ学生にはやや焦点がぼけるような研修となった反省がある。

さらに、今回は参加費の援助があったため、10人の学生の参加が見られた。逆に言えば援助がなければ学生の参加数は減少していたであろう（事後のヒアリングによる）。

今後の方向性としては、福光に移住した教育者・山本宗平の日記を含む関係資料などを利用した教職志望者の研修の場を設けるなどの工夫が考えられる。（以上）